

平成二十三年度第二十一回全国読書作文コンクール

小学生の部・大賞

失敗をのりこえて

金井 智奈

時間はただ過ぎ去っていくだけのもの――。今までは、そう思っていたけれど、「なかったことにしたい」時間もあるのだと思った。

千年に一度と言われるような大地震が起きた。多くの人が亡くなった。まだ、避難所生活をしている人も多い。(パワー・オブ・アン)があつたら、津波が来る前にみんなを避難させることができたのに。みんなを救うことができたのに。何度もそう思った。

私たち家族は、石巻にいる親せきを訪ねてみた。お父さんも子どもの頃住んでいたの、思い出がいっぱいある街だ。でも、以前とは全く違う風景になっていた。がれきの山。あちこちの建物の窓ガラスが割れ、お店のシャツターがこわれ、花だんの花もぐちゃぐちゃ。人の姿も見えない。「壊滅状態」とは、こういうことなんだと思った。親せきのおばさん達が無事で元気だったので、ほっとした。笑顔で私たちをむかえてくれたので、私は何だが涙が出そうになった。「本当は、おばさん達も大変なんだろうな。」と思った。被災地の人たちは、つらくても、だれを憎む

ことも恨むこともできない。みんな、そのことを知っているから、「泣いていてもしょうがないもんね。」「前に進まなきゃね。」と言っている。まるで自分に言い聞かせているみたいだった。

(パワー・オブ・アン)があつたら、欲しくないという人はいないと思う。あの機械があれば、失敗やいやなことを全部取り消すことができるのだから。それは確かにうれしい。世の中、いいことだらけになる？本当にそうだろうか。自分の都合のいいように使う人が出てくると、どうなるんだろう。そう考えると何だか怖い。失敗するから、成功した時うれしいと思う。いやなことがあるからいいことがあつた時に、幸せな気持ちになる。失敗やいやなことがあるから、私達は考えたり反省したりする。「今度がんばろう」という気持ちになる。

ギブも妹のために必死でがんばった！だから今はとても頼れる、強いお兄ちゃんになったはずだ。

対象図書名 時間をまきもどせ！

大賞へ、審査員のひとこと

今回は、この作品のように震災を取り上げた作品が多くありました。そのいずれもがこうした特異な体験をしたからこそ深く思索したすばらしい作品が書けたのだと思います。本作品の、筆者が被災地である石巻

の親戚を訪ねる部分はとても説得力があります。作文中の「被災地の人たちは、つらくても、だれを憎むことも恨むこともできない。」という言葉が筆者がつかまえてきたところからこの本にもどって、筆者が現実の津波の街で見て感じたこととオーバーラップさせているところがとてもすばらしいです。

受賞者のひとこと

四年生の私にとっては、今回がコンクールデビューです。セミナーの先輩たちのように「いつかは私も大きな賞がとれたらいいなあ」と思いつながら、ただ一生懸命に書きました。

いろいろ考えて、ひらめいた事をどんどん書いてみました。自分の気持ちを素直に書いてみました。「時間」について考えている内に、今回の大地震のことが頭に浮かびました。たくさんの映像が浮かんできて、書かずにはいられなくなって鉛筆を動かしていました。地震や津波をなかつたことに出来たら、どんなにいいだろうと、心から思いました。でも、現実には起きてしまったのです。「時間をまきもどせ」を読んだのがきっかけで、私は、改めて大切なものについて考えることができました。

「大賞」というすばらしい賞をいただくことができ、うれしさいっぱいです。これからも、たくさんの本を読んでいろいろなことを考えていきたいです。

小学生の部・最優秀賞(小四)

時間の使い方

東 宏一郎

ぼくは、小学三年生の時、学校で剣道ごっこをしていて、相手が教室の窓ガラスに当たって割ってしまったことがあります。その時、ぼくは、「時間をまきもどしたい。」と心の中で思いました。題名を見て、「どんな風に時間をまきもどすのだろう。」と思いました。読んでみたいと思いました。

この本の主人公、ギブは不思議な老人から間違いをやり直す機械(パワー・オブ・アン)を手渡されました。ギブは友達のアッシュと一緒に移動遊園地に行きました。ギブの妹、ロキシーも一緒に連れていきました。遊園地の中で目をはなしたすきに、ロキシーはトラックにひかれてしまいました。ギブは(パワー・オブ・アン)を使って一度時間をまきもどしました。ロキシーは助かったけれど、ロキシーを助けるためにかわりに別の友達のレイニーがひかれてしまいました。だからまた時間をまきもどしました。今度はみんなを助けるために自分がひかれてしまいました。

この物語で一番心に残ったのは、(パワー・オブ・アン)を使って、ロ

キシーは助かったけれど、レイニーがひかれた場面が悲しくなったことです。理由は、最初は時間をまきもどしただけでだれもひかれないう思ったけれど、友達がひかれてしまうなんて思いもしなくて、びっくりしたからです。

対象図書名 時間をまきもどせ！

受賞者のひとこと

習い事から帰ってきたぼくを待っていたのは、喜色満面の顔をした母でした。だきしめながら母は、

「作文コンクールの最優秀賞おめでとう。」

と、言いました。ぼくは「えっ。」と思い、びっくりしました。なぜなら、国語や足分が少し苦手なぼくに最優秀賞などとれるはずがないと思っただからです。ぼくが帰ってきてから少したって父が帰ってきました。ぼくが最優秀賞をとったことを話すと、父は、

「全国で二番なんてすごいぞ。おめでとう。」

と、笑顔で言ってくれました。ぼくはさらにうれしくなりました。

国語や作文の少し苦手なぼくが最優秀賞をとれたのは、やる気と努力があっただからだと思います。それに、この賞をとって感想文をかくことが楽しくなりました。前まではあまり手を付けなかった読書感想文でしたが、これからはもっとたくさんの本を読もうと思います。父、母、じゅくの先生、本当にありがとうございました。

命が変えられてしまいます。もし時間を改造したりすると、他の人の運命が変えられてしまいます。そうなる、自分の運命が変えられてしまったような気持ちにして、とてもいやな気分になります。

ぼくは、今まで時間はてき当に使ったり、ただすぎさっていくものだと思っていました。でも、今はそうではないと思い、有こう的、つまり大事に使わないといけないということが分かりました。また、ぼくは時間はんぺきにまきもどせないということも分かりました。ですから、ぼくたちは時間は大切に使わないといけないのです。時間はまきもどせないのです。

小学生の部・最優秀賞(小五)

時間をまきもどせ！を読んで

森見 俊一郎

この本を読んで、こんな事が出来たら世の中どうなっていくのだろう。

失敗をしない人間なんてだれもないのに……。

でも、「パワー・オブ・アン」があればいいと思った。友だちとけんかをする前に止める事が出来るのに。九十点のテストを、もう一度やり直せるのに、だけどこれは少しずるいと思う。生活の中でいっぱい反省する事がある。

テストの前に問題のこたえがわかっていたら、ぜったい百点とれるのに。塾にも行かなくていいのに。

たとえば、病気に人に薬を一つぶ飲ましたら元の体に治るとか、医者もいらぬし、病院もいらなくなる。もしも「パワー・オブ・アン」が世界にあったとしたら、しっぱいしない人ばかりで新しい物が出来なくなるし、しっぱいすることで新しくやくに立つ物が発明される。しっぱいをしない人がいたら世の中から楽しい物がどんどんへっていく。

主人公のギブは老人から「パワー・オブ・アン」をもらったがそんな事はぜったいにありえない。妹のロキシーが移動遊園地で大けがをして、こんすい状態になってしまったのだ。それでギブたちは「パワー・オブ

・アン」を使って妹がけがをする前に止めることが出来た。

ぼくもカッターナイフでけがをしたことがあるけど治すのに長い時間がかかった。左手だったので字を書いたり食事をするのに不自由はなかったけれど、おふろとか洗面などに手伝ってもらわなければいけなかった。毎日何も考えずに生活している事がどんなにありがたい事かよくわかった。そんな人に会ったらぜったいに助けてあげたいと思う。

ぼくはこの本を読んで、便利な機械を知った。でも、ここで、機械はすべてにおいていいのかどうか一度考えてみようと思った。世の中にはいろんな機械が出来て世の中がとても便利になっているけれど、機械は心がこもっていない気がする。話をしないし、スイッチ一つで何もかもかんたんにあっさり出来るように思う。食事一つ見てもインスタントラーメンやヤキソバなどいろんな物がレンジですぐに出来る。こんな事が続いたら本当の食事のよさがわからなくなってしまおうと思う。

やっぱり家庭のあじを作っていく事が大切だと思う。人の手のぬくもりが大切なのだと思う。でもやっぱり「パワー・オブ・アン」もあつたらいいなと思うけど、それによる使い方が大切だと思う。

「しっぱいは成功のもと」と言う言葉があります。苦しいけど努力して続ける事が大事だと思う。

山本先生からぼくの読書作文が最優秀賞に選ばれたと聞いて、声に出せないくらいうれしかった。今年の夏休みは、夏期講習やスイミングの朝練で二時間ぶつ通しで泳ぐなど、あまり楽しくない夏休みだったけど、この賞をいただいたことで、夏休みがんばってよかったと思った。じゅくのみんなも一緒に喜んでくれて喜びが倍増し、その後の授業はうわの空だった。努力をすればみてももらえることもあるとわかった。これからもいやなことがあってもがんばりたいと思う。山本先生、おばあちゃん、両親に感謝し、これからもいやなことから逃げずに取り組んでいこうと思う。

小学生の部・最優秀賞(小六)

「今」を生きる！

三浦 紗綾

家族や友だちがどれだけ大切な存在なのか。普通に暮らせることが、どんなに幸せなことなのか——ということにふだん私たちは、気付かないで暮らしている。たいてい失ってみてはじめて、その大切さに気がつくのかもしれない。私もその一人だ。

同じクラスの男子が、去年亡くなった。身体に障害をもっていたので、話すことも、階段の昇り降りもままならなかった。何かにつけて、誰かの助けがないと大変だった。でも、クラスの間みんなもそれに慣れてきて、彼の身ぶりで、言おうとしていることが分かるようになっていったし、彼をみんなで、支えるようになっていった。話せなくても、身体が不自由でも、私たちと一緒に学び、一緒に笑い、一緒に生きてきた。彼は決して自分自身を卑下することはなかったし、彼を差別して、仲間はずれにするような人間も一人もいなかった。私たちのクラスは思いやりの心が自然に育っていった。そしてクラスの結束力が強くなっていった。だけれども、そんな毎日がずっと続くと思っていた。それがいつからか、彼は学校を休みがちになり、とうとう長い入院生活に入ってしまった。

知らせは突然だった。脳しゅようのため亡くなったと知らされた。クラスは静まり返り、あちこちですすり泣きが聞こえてきた。何て短い人

生だったんだろう。やりたいことがたくさんあったんだろうなあ。悔しいだろうなあ。——いろいろな重いが、頭の中を駆けめぐった。そして、私はあることに気がついた。私たちのクラス一人一人にとって、彼がいかに大切な存在だったかということ。私たちは彼に手を差しのべていたつもりだったけれど、本当はそうじゃない。私たちは彼から「生きる勇氣」をもらっていたのだ。だから、私たちは彼の分までしっかり生きなければならぬ。

今回の地震でも多くの命が失われた。何だか悲しいことばかりで気持ちも沈んでしまいそうだ。でも乗りこえていくしかない。みんなで力を合わせてがんばるしかないんだと思う。

この夏、仙台市の小中学校みんなが協力して七夕飾りを作った。一人一人が心を込めて鶴を折り、さまざまな祈りをメッセージに込めた。小さな鶴が幾重にも重なり、大きな七夕飾りになっていた。これは、まさに「絆」の象徴だと思った。

だれもが時間をまきもどすことはできない。だからこそ「今」を一生けんめい生きなければならぬ。家族や友だちを大切にしながら……。

対象図書名 時間をまきもどせ！

受賞者のひびき

おとし「優秀賞」をいただき、その喜びにひたっていた私でした。それが何と、今回は「最優秀賞」と聞いて、喜びも驚きも倍増です！

塾では、毎年のように上位の受賞者が出るので、先輩達からたくさんのことを学び、吸収しようという気持ちで取り組んできました。小学二年生で入塾した私にとって、修業する時間はたっぷりありました。中でも「読書の時間」がきっかけで、読書に夢中になり本をたくさん読むようになったことは、私にとって大きな収穫です。本の数だけたくさん感動を味わえるからです。

作文コンクールの課題図書も、毎年わくわくしながら選んできました。今回私が選んだのは「時間をまきもどせ」です。はらはらドキドキしながら読み終えました。「ああ、面白かった！」で終わらせないのが、このコンクールの図書の時です。今年もいろいろな事を考えました。一冊の本を読んで、深くじっくり考える、いつの間にか私はこの時間がとても好きになりました。

中学生の部・大賞

「隔離」と「共存」

角南 莉彩

「人生はなんてすばらしいんだろう。」

私は十五年間生きてきたが、今までにそんな言葉を言った事がない。心の中で思った事すらなかったし、実際に周りの人の口から聞いた事もない。おそらくこれから先もなかなか言う事のないだろう大きな一言であると思う。しかしこの言葉は重度の知的障害を持って生まれたこの本の主人公・ピーティの素直な気持ちだ。私よりもずっと辛く、悲しい人生を生きてきたというのに……。

私は中学二年生の頃、学校の道德の時間でハンセン病についての授業を受けた。当時ハンセン病に感染した人は理由がどうであれ、全員療養所と称される施設に強制的に送り込まれ、施設から出る事や人に会う事もなかなか許されずに一生を過ごしていたらしい。又、その病気は遺伝により感染するという嘘の情報のせいで、ハンセン病感染者の家族も周りから差別を受けていたという。それはもう結婚や就職に至るまで。余りにも残酷過ぎる事実だが、日本でも現実起こっていた事である。この時代から障害者への差別は現在どのようになっただろうか。

現在、私も含め子供達は学校生活の中で、差別や偏見に対する道德教

育を受ける。スーパーなどでは障害者専用の駐車コーナーが出来たし、車椅子での通行を想定し階段ではなく、スロープや手すりが付いた施設も多い。障害者だけではなく、高齢者にも使い勝手のよい「ユニバーサル・デザイン」と呼ばれる商品の開発も数多く進んでいる。例えば、レバー式水栓やシャンプー容器についた識別用のくぼみなどが挙げられる。

障害者の「害」の字を平仮名で書いた「障がい者」という言葉も最近目にするようになった。障害者は人を害するものではないという意味があるそうだ。この言葉が自然に使われるようになればいいと素直に思う。

このように「隔離」の時代から「おなじ社会のなか」で暮らすという「共存」の時代へと緩やかに移っているように感じる。

にもかかわらず差別や偏見は完全にはなくなならない。人は誰でもピーティのような人を見かけると、悪気は全くななくても、もの珍しそうな好奇の目で見てしまう。私だってそうだ。可哀相と思うかもしれない。正直なところ、あんな風にならなくても良かったとさえ思うかもしれない。

「不自由ではあるが、けっして不幸ではない。」この言葉にガツンと一発、頭を殴られたような気がした。ピーティだって人々の嫌悪の目、意地の悪い行動や言葉に触れて、孤独に悩んだだろうに。どうしてピーティは自分の人生を悲観していないのだろう。どうして周りの人への憎しみを募らせないのだろうか。

生まれた時、ピーティは「考える力」すらないだろうと言われていた。だがやがて、知的な障害はない事が分かる。きちんと伝える手段は持つ

ていないが、「考える力」はあり、周りの人に少しずつ理解されていく。そこにはもちろんピーティの努力だけではなく、運命的な人との出会い、よき理解者との出会いが大きく存在する。

私には三年前、脳出血で倒れた祖母がいる。前日まで元気に仕事していたがいきなり倒れ、十数時間の手術を受けたが、今なおベッドに寝たきりの生活だ。目は開けるようになったが、話す事も、一人で動く事も出来ない。私が見舞いに行っても認識しているのかどうか解らない。この祖母にも今「考える力」があるのだろうか。周りの人に気づいて欲しいというサインが送られているのだろうか。もしそうだとするならば、私もピーティにとってのオーウェンやカルビンのような存在になれるかもしれない。ふとこの本を読んでそう考えるようになった。

ピーティだって家族とも呼べる理解者達を失って、一度は「だれかを好きになるのはやめよう。」と誓う。傷つく事を恐れて。しかし再びトレバーという少年と運命的な出会いをする。ピーティは力一杯、精一杯生きて冒頭の言葉に行き着くのだ。

三月に起こった東日本大震災でも、一番叫ばれていたのは、人と人との絆だった。親子の絆、友達同士の絆、近隣の人との絆もあっただろう。ピーティ達の絆もまた、確かに存在していた。

ピーティの人生は、まさに人との出会いによって、色づいていったように思う。真っ白だったピーティが、出会いを一つ重ねる度に、色が濃くなり輝きを増す。もしかすると様々な色が混ざり合っていくのかも

れない。

十五歳の私にも、この先おそらくまだまだ辛い事、悲しい事が山程待っているだろう。しかし、それを上回る出会いも待っているに違いない。そしてその出会いにより、少しずつ違った色に染まっていくのだろう。そこで初めてピーティのように、人生のすばらしさを実感出来るような気がする。

対象図書名 ピーティ

大賞へ、審査員のこと

震災と並んで今回目立ったのが、障害者についての作品です。障害者が「隔離」されていた過去から「共存」する現代を観察する筆者の書きぶりはきわめて論理的で知的です。そして筆者は身近に起きた祖母の病氣と障害から、障害者のよき理解者、大震災後の人と人の絆へと思いをつないで、「不自由ではあるが、けっして不幸ではない。」「人生はなんてすばらしいんだろう。」の真の意味を実感しています。筆者が一冊の本から自ら感じ取ってくれた（気づき）に審査員一同感謝したいくらいです。

受賞者のひとこと

「莉彩の作文、大賞になったんだって。」母の言葉に一瞬で頭の中が真

っ白になった。どうやら人間というのは本当に驚くと、言葉が出なくなるらしい。しばらくすると、口もとがニマニマとにやけはじめ、慌てて修正する。嬉しさがじわじわと湧いてくる。

昨年度も最終選考に残ったと聞き喜んだものだが、今年の嬉しさは格別だ。宝くじでも当たったら、こんな気分なのだろうか。

「表彰式は長崎だって。」長崎かあ、と春に修学旅行で訪れた長崎を思い出す。平和公園で折り鶴をささげ、平和への誓いを立てた事が印象に残っている。半年に二度も訪れる事になるなんて、縁があるんだなと感じた。

今年は東日本大震災があり、このコンクールでも被災地からの応募が少なかったと聞いた。私と同年代の人達も多くの悲しみを体験しただろう。どうか、復興が一日でも早く果たせられますように。今回の大賞というすばらしい賞をありがとうございます。

中学生の部・最優秀賞(中一)

困っている「だれか」のために

角南 譲

ぼくは、毎日、ごく普通の生活を送っていた。父も必ず帰ってくるから、キークのように、父親の心配をすることもない。毎日、家族と一緒に暮らす。——それは、当たり前だと思っていた。

三月十一日、その日は父の誕生日なので、毎年のように母の手料理とケーキを囲んで楽しくお祝いをするはずだった。しかし、この日、誰もが予想もしていないことが起きた。東日本大震災。学校から家に帰る途中、街の異変を目の当たりにし、ぼくは、あつけにとられた。あちこちのマンホールから水があふれ出している。踏切はこわれ、線路で電車が傾いたまま止まっている。店の看板は倒れ、屋根のかわらなどが落ちていく。ラジオから衝撃的なニュースが聞こえてきた。巨大な津波に街のみ込まれたという。次々と恐ろしいニュースが流れる。薬局を数店舗経営し、薬剤師として働いている父は、職場が遠いためこの日は帰宅できず、車の中で一夜を明かした。

翌日、帰って来て安心したのも束の間、父は、休んでなどいられなかった。薬を必要としている人たちが殺到した。病気やけがで、大勢の人

が薬を必要としていたのだ。困っている人のために父は働かなければならなかった。一、二週間帰れないかもしれないと聞き、正直ぼくはキークと同じように行ってほしくないと考えた。あちこちで事故も起きていたし、余震も続いている中、父が出かけていくのは、本当に心配だった。

でも、家を出る時、父はぼくの目を見てこう言った。「いいか、家のことは頼んだぞ。ちゃんとお母さんを守るんだぞ。」と。生まれて初めて言われた言葉だった。この時、ぼくは父の期待に応えようと心に誓った。同時に、長男としての自覚を持った瞬間でもあった。

ガソリン不足で車が使えず、緊急の薬を手に入れるため病院に走って行ったりした。数店舗の薬局の従業員は皆、仕事に出られる状況ではないので、父は一人で次から次へと店をかけずり回っていた。父の疲労は、ぼくの想像を越えるものだったと思う。困っている人のために何とかしたい。――□父を突き動かしていたのはただその一心だった。

ぼくはこの震災を経験して、改めて父のことを考えた。そういえば、これまで一度も父は弱音を吐いたことがない。どんなにきつくても、辛くても、父は絶対に弱音を吐かない。むしろ、いつも人に感謝をして生きている。ぼくは、そんな父を今回ほど誇りに思ったことはない。

人のために、どれだけ本気で行動できるか――。それは、なかなか難しいことだ。戦場で地雷を受け、足を切断することになったのに、それでも、また戦場に行つて人の命を救いたいと言っているキークのお父さんは真の医者だと思う。キークの友だちが「キークのお父さんは、英雄

だ」と言っていた。みんなに英雄だと認めてもらわなくても、ぼくやキークがちゃんと分かっているならば、それでいいんだと思う。困っている「だれか」のために頑張る父をぼくも心から尊敬する。

対象図書名 小さな可能性

受賞者のひとこと

電話に出た母は、突然「ええーっ！」と、家中に響き渡る大きな声をあげた。その驚き方は半端ではなかった。「一体、何事？」と、母の声に驚いている僕に受話器が手渡された。「最優秀賞、おめでとう！」先生の弾んだ声だった。僕は状況がのみ込めず、すぐには言葉が出なかった。入塾して二年足らずの僕が、作文で「最優秀賞？」信じられなかった。心臓が止まるほど母が驚くのも無理はない。

入塾する前の僕は、国語がとて苦手だった。作文も書けなかった。本当に深刻だった。母は、そんな僕の将来を心配して国語専門塾の門をたたいたのだった。

無我夢中で取り組んできたセミナーでの一年半。作文の時間は、「ひらめいたことを何でも好きにだけ書く」というやり方。僕もみんなに比べて自分のことを好きにだけ書くようになった。先生のヒントで枚数が増えていき、先生がほめてくれるので、いつの間にか書くのがどんどん楽しくなっていたのだ。

中学生の部・最優秀賞(中二)

この様なすばらしい賞をいただき、今僕は嬉しさをかみしめている。一緒に学び、向上し合えるセミナーの仲間の存在はとても大きいと、改めて思う。そして、いつもあふれんばかりの情熱で指導して下さいる先生に感謝の気持ちでいっぱいだ。本当にありがとうございました。

「私は私、君は君」

貝原 愛

「あれっ？」

私は驚いた。この本の主人公「ピーティ」は心があるのかないのかわからなかったからだ。人々に優しい目を向け、人々を認め、許しているのに、何度裏切られても、彼は「憎む」ということを知らない。私はよく、「ピーティ」のことがわからなかった。しかし私は、「ピーティ」を読んでいるうちに、ピーティのすばらしさに魅了され、会ってみたい、話してみたい、と思うようになった。ピーティに会ったばかりのトレバーと同じように、障害者を冷たい目で見てしまう自分の考えを、ピーティは変えてくれるのではないだろうか、と思ったからだ。

私は自分が嫌だった。自分に都合のよくない人たちをすぐに、「うつとうしい。」

と違ってしまう自分が嫌だった。しかし、ピーティはどうだろう？冷たい目で自分を見る人たちにも、彼はにこりと微笑む。おそらく私も、ピーティを見たら、驚きを隠すことができず、その場から、一刻も早く逃げだしたい、と思うだろう。しかし、そんな私のことも、ピーティは許

してくれるような気がしていた。

しかし、あとがきや最後のページを読んでとても驚いた。「物語」、「フイクション」、と書いてあったからだ。ピーティの写真を見てみたいと思っていた私は、かなりショックを受けた。しかし、本を読み終えた私は、ピーティがすぐそばにいるような気もしていた。

私の同級生には、少しだけ足の悪い女の子がいる。詳しい事はよく知らないが、小さい頃から足が弱かったらしく、両足に装具をつけて生活している。しかし、それを見た同級生の男子達は、

「サイボーグー！」

と言ったり、

「人造人間28号じゃー」

と言うのだ。これは、どうなのだろう？彼女はもちろん「サイボーグ」でもないし、「人造人間」でもない。ただ、足に装具をつけているだけの「人間」だ。人に造られたのではなく、彼女の母親と父親の間に生まれたのだ。しかし、彼女は反論しない。気にせず生きていこうと心がけているように見えた。この本を読み終えたあと、ピーティと彼女が少し重なったような気がした。

私はこの本を読み終えた時、一つ学んだことがあった。それは、「AはA、BはB」ということだ。つまり、一人の「人」に障害があっても、その人に障害があるのではなく、障害もその人自身である、ということだ。ありきたりの言葉に置き換えると、障害もその人の個性なのだ。

ピーティがもし、普通の障害のない人だったら？ピーティは、実の両親や兄弟たちと幸せに暮らしていたかもしれない。しかし、施設に行かないので、親しくしていたカルビンや、エステバン、オーウェン：それからトレバーとも会うことはなかっただろう。そして何よりも、普通の人が見ても、全くあたりまえとしか思わないこの世界を、あんなに幸せそうな顔で味わうこともなかっただろう。ピーティは、障害が無い人生の方が本当に良かったのだろうか？ピーティの

「オー、オー、ノー、ノー、」
という声がきこえた気がした。

私は、この「ピーティ」という本に感謝しなくてはならない。そして何よりも、ピーティという人間に感謝しなくてはならない。私はこの本に、世界と人のすばらしさを教えてもらったのだ。私たちが暮らしているこの「世界」がどれだけすばらしいのか、そして、「人」という生き物のすばらしさも教えてもらった。そして何よりも、「AはA、BはB」という事を教えてもらった。私は、障害などをもった人々の話を聞くたびに、なぜこの人だったんだろう？なぜこの人がこんな目に：？とばかり考えていた。しかし、この本を読んで、考えが変わった。なぜこの人？ではなく、それが「この人」なんだ、と思えるようになった。私は障害をもっていない。しかし、目が悪くからコンタクトだし、運動のセンスもあまり無いから、部の顧問の先生によく怒られるし、気がきかないから、よくお母さんにも怒られる。そういうものではないだろうか？障害

とは。「ピーティ」のような思い障害をもった人の気持ちはわからない。そして、どこかでこの文章を読んだ人が、障害はそんな軽いものではない！と言っているかもしれない。でも私は、人には人の心の強さに相当した障害が与えられるのではないかと思う。心の弱い私にはこの程度の障害が丁度いい個性だったのかもしれない。

私は言い続ける。

「私は私、君は君。」

対象図書名 ピーティ

受賞者のひとこと

私は、賞がもらえたと知った時、とても驚き、喜びました。私は今年のコンクールでは賞がもらえなかったからです。そして今年も賞がもらえるなんて思ってもみませんでした。私は昨年読んだ本よりも今年読んだ本は何か自分につながるものがあるような気がしました。

私は今年賞をもらえたことで一つ学んだことがあります。それは自分と本を重ねて、その思い、考えを素直に率直に書くからこそすばらしい感想文になるのだということです。私は他のみなさんの作品を読んだわけではありませんが、賞をもらうことに意味があるのではなく、文章を書き、気持ちを伝えようとすることに意味があるのだと思います。

ですから、毎年開催されるこの「読書作文コンクール」に心から賛同していま

す。

最後に、私の作品を読んで下さった審査員の皆様、アドバイスをして下さい。先生、本当にありがとうございました。

中学生の部・最優秀賞(中二)

人生を楽しもう！

川口 紗椰

人の命の重さはすべて等しく、その価値にちがいはない。たとえピーテイのように不自由でもそうでなくても、同じく尊いものなのだ。ピーテイは、彼の人生もものすごく大事なものだということ、自分の人生を生き切ることで私たちに教えてくれた。

私我が家の待望の女の子として生まれて間もなくのころ、私の家族はある出来事にみまわれ、深い悲しみにつつまれていた。あまりにも幼かった私は、家族のそんな悲しみと苦悩の日々を知らずに育っていた。

「どうして私のことは、お兄ちゃんみたいにかわいがってくれないの？」
そんな言葉を、私がこれまで一度だつて口にしたことがないということ
を私はよく母に感謝される。そのお陰で、母はどれだけ心が救われたか
知れないというのだ。

しかし、そんな言葉を口にせずには心から兄のことを愛せる私に育ててくれた両親やまわりの方々に感謝しなければならないのは、本当は私の方だいつも思っている。

私はもの心ついたころから、自分の兄がハンディをかかえていること

をごく自然に受け入れていた。兄は不自由だけど家族の愛につつまれ決して不幸ではなかったし、私も兄の妹に生まれて不幸だったことは一度もない。そうは言っても私が知らないところでの両親の悲しみや苦悩は計り知れないものだったにちがいない。目の前が真っ暗になることも何度もあっただろう。

兄にハンディがあるとわかったのは、兄が三才近くになってからで、体は健康そのものだったけれど、知的ハンディは重度だった。

専門家という人に何年かに一度、判定してもらわなければならないのだが、その度に、

「三才くらいの知能ですね。」
と簡単に片付けられてしまう。

人間は一人一人個性がちがうけれど、ハンディの種類も程度や特徴も一つとして同じものはない。だからもっと一人一人を大切に考えたデリケートな対応ができないものかと、いつも少しだけ不満な気持ちがあわいてくる。

私の兄は幸せを感じ、感謝の気持ちを表す力を持っている。そのことにいち早く気付いたのは母だった。

「お兄ちゃんは誰よりも幸福にならなくちゃね。お兄ちゃんが心から幸せだと感じられる人生を送ってくれるのが何よりよ。」

と母は言う。

私たち家族の中心にはいつも兄がいる。そしてそのまわりにはいつも温

かい人たちが集まってくる。きっと兄がいてくれたから、私は幸せなんだ……。

主人公のピーティは私の兄とは異なる知的ハンディのない脳性まひであつたが、知的ハンディがあるという扱いをされてしまう。そして家族と引き離され施設に隔離された。時代が少しちがっただけであまりにもひどい……。

私にとってピーティの存在はどうしても兄と重なり、すぐにでも救いに行つてあげたかつた。知識が無かつたがゆえに、ピーティに恐怖や嫌悪の目を向ける人々がいる反面、他人でありながらピーティに理解を示して家族以上につながつてくれた登場人物たちを私は心から応援した。ところが時代背景もあつて、なかなかピーティたちに手をさしのべることがままならなかつた現実には私は落胆を繰り返した。時代が進み、私とほぼ同年令のトレバーが現れたが、彼もまたピーティに恐怖や嫌悪の目を向ける人たちの一人でしかなかつた。その上少し頼りなかつたトレバーだつたが、ピーティと心を通わせるようになり、優しさや勇気を持った彼らの一番の理解者へと成長していく姿はとて頼もしく素敵だつた。

パリセード滝へのハイキングの場面は、私にはまばゆいほどに美しい光景に思えて胸が高鳴つた。はたから見ると何だかおかしな集団に思えるかもしれないけれど、ハンディをかかえる人々と健常人々が、それも血のつながりを越えて共にくらししている姿は胸を打つ。この光景こそが私たちの社会の本当にあるべき姿なのだと思えてならない。

私はハンディをかかえる人たちの思いを一番理解できる立場に生まれ、た者として、彼らと社会をつなぐ役割を果たしていきたい。

私たちのまわりにはたくさんさんのピーティがいるはずだ。そして彼らの生きる姿は、私たちに人生の大切さを教えてくれる。私は世の中をたくさんさんのトレバーたちでいっぱいになりたい。そのために、私ができることはとても多い……。

そして世界中のピーティが一人残らず幸せな人生を生きられるようになったとき、優しさや感謝にあふれた本当の意味の平和がやってくると私は思う。

「ゴーフイー。」(楽しんでおいで！)

ピーティの声が聞こえたように思えた。

「さあ、私も人生を楽しもう！」

中学生の部・最優秀賞(中三)

「ピーティを読んで」

根本 直美

普通に難なく過ごしてきたある日、突然自分が障害者になってしまったらどんな気持ちができるのだろう。どのようなことを考え、どのように思い生活するのだろうか。

近所を歩いていると見知らぬ人に声をかけられたことがある。しかし、その人が奇声をあげて近づいてきたため私はひどく驚き、すぐに逃げ去ってしまったことを覚えている。その人が不審者だと思ったからだ。後で母に話しを聞くと、その人は体のどこかに障害を持っていると言っていた。当時、小学生だった私には身体が不自由なく動く人を障害者だと思うことはできなかった。それからよく学校の下校の時にその人に会い、話しかけられるようになった。「よう」とか「何しとん」などといった単なるあいさつだったが私にとってはずごく怖く思えた。いつも避けるように通り、話しかけられても無視を繰り返した。だがある日、ちよつとしたきつかけでその人と私の友達とで一緒に遊ぶことになった。鬼ごっこをするって聞いたとたん、私にはその人が本物の鬼のように見えた。内心すごく嫌だった。どうして友達は平気なのだろうと不思議に思った。その

人が鬼になると私は必死に逃げた。その人が襲いかかってくるのではないかと心配した。しかし、その人は少し変わっていたがみんなに恐怖を与えるようなことは決してしなかった。私はその時、初めてその人が悪い人ではなかったことが分かった。体全体の力が抜け、恐怖が安心に変わったのが自分でも分かった。初めて人を外見で判断してはいけないと気づいた。

小さい頃の私は何も分かっていなかった。そして知ろうとしていなかった。周りの人たちが必死に私と関わろうとしてくれているのをただ普通に何事もなかったかのように見過ごしてきた。常に頭の中に曖昧な知識を入れ勝手に自分の中で普通の人の基準をつくり、その人たちと少しでも違うと変人扱いをしたり、悪い人だと決めつけたりしていた。その人たちがどのように周りの人たちに扱われ、どのような悲しい思いをしてきたのか少しも考えていなかった。今でも、その人と話すのはとても怖い。けれど今は変人や悪い人だとは決して思わない。障害とは望まなくても勝手に人生についてくる。人生とは思いがけないことが急に起こるものだ。明日が保障されることは絶対がない。そんな人生という長い道で幸せを見つけ出すことは、とても大変なことだと思ふ。

ピーティは不幸の中で幸せを見つけて生きてきた。私は、彼が人と深く関わることを生きがいにしてきたのではないかと思う。「生きる目的」それを導き出すにはまだ私たちには早い。これからたくさんを経験して、失敗・成功して多く学んで少しずつ見つけていけばいいと思う。

人生とは、自分探しの旅だ。自分の望むこと、それを探すために人と関わり、それを教えてもらうためにより親しくなる。そしてまた、自分も相手のことを教えてあげるものだと思う。よく他人は自分を写す鏡だという。その意味がよく分かった。人間は一人では決して生きてはいけない。そして常に人と関わっていないければ、旅はすぐに終わってしまう。人生に目的は必ずなくてはならないものである。だから人々は新しいことに挑戦したり、何か一生懸命になるのだ。と、私はピーティにおそわった。

ピーティは言葉を話すことができなかったが、私の心には彼の声がちゃんと聞こえてきた。彼は人生を楽しむすべを知っていた。苦しい現実を受けとめ、生き続けることで周りに勇気を与えてきた。また彼を支えてきた、カルビン・アンダースの存在はなくなかったと思う。ピーティは多くの人々の役に立ってきたが、そんな彼自身を支えてきた人もたくさんいた。なにげなくしている行動にも、なんらかの価値が必ずある。人は常にだれかの役に立っていると私は思う。

私の生きる目的とは何だろう。ピーティと一緒に過ごすにつれて頭の中に大きな疑問が浮かんだ。だが、その答えはもう彼が自分の生涯をとおして私に教えてくれた。どんなに歳をとろうが、彼は私たちの心の中でいつまでも生き続ける。

「フイーグー」私はピーティじいちゃんに心からそう伝えてあげたい。

受賞者のひとこと

最優秀賞に選ばれて、正直とても驚きました。私は小さい頃から文章をつくる機会があまりなく、作文を書くことが苦手でした。だから私の読書作文が選ばれたと塾の先生から聞いた時は、あまりに突然すぎて信じられませんでした。

今回「ピーティ」という一冊の本と真剣に向き合うことで、普段私たちが難なくしている多くの行動も障害がある人から見るととてもありがたいことだと気づかされました。もし私が言葉を使うことができなかったらどのように気持ち伝えるのでしょうか。この本を読んで、私は障がい者の方々への見方までもが変わったと思います。

夏休みという長い休みの間に、とても良いきっかけを与えてくださったすべての方々に感謝します。